

Title	自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応
Author(s)	小林, 知博
Citation	対人社会心理学研究. 2002, 2, p. 35-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10256
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応¹⁾

小林 知博(大阪大学大学院人間科学研究科)

精神的健康および主観的幸福感という社会的適応の指標に、自己・他者評価がどのようにかかわるかを検討することを目的とし、2つの研究を行った。様々な特性について、ポジティブ・ネガティブな自己・他者評価、また親密な他者との関係性認知と社会的適応の関連を検討した。研究1では、自尊心の高低にかかわらず親密な他者(親友)や自己への評価は、親密でない他者(クラスメート)への評価よりもポジティブであること、また、精神的健康に関連が高いのは、自己をネガティブ視する程度の低さであることが示された。研究2では、精神的健康には自尊心の高さが、主観的幸福感には親友や母親との関係性をポジティブ視する度合いが、高く関連していることが明らかになった。社会的適応を、さらに多種類の対人関係の中で捉えて実証研究を行っていくことの重要性が示唆された。

キーワード：自己評価、他者評価、ポジティブ幻想、精神的健康、主観的幸福感

問題

近年、人が情報を歪めて認知する、特に自己に関する情報がポジティブ視されがちだという現象に関して、比較文化的観点からの知見も加えて多数の研究が行われている。それらの研究の多くは、自己観には、自己は他者と独立しているのとらえる相互依存的自己観、自己は他者と結びついているのとらえる相互依存的自己観があり、文化によって優勢である自己観が異なると主張している。そして相互独立的自己観が優勢である北米では自己を他者よりもポジティブに捉えるという結果が頑健である一方、相互依存的自己観が優勢であるアジア、とりわけ日本では、自己を他者よりもネガティブに捉えるという結果が報告されている(e.g., Markus & Kitayama, 1991; Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999)。

このように、情報や出来事を自己に都合良く解釈することを、ポジティブ幻想(Taylor & Brown, 1988)という。Taylor & Brown (1988)によると、ポジティブ幻想は、(1) 自分自身を実際以上にポジティブにとらえる(自己評価)、(2) 自分の将来を非現実的なまでに楽観視する(楽観主義)、(3) 外界に対する自分の統制能力を非現実的に大きいと知覚する(統制知覚)という3領域からとらえられるとしている。そして、それぞれの領域において、人は一般的に他者より自分の方がポジティブだと考えていると指摘した。外山・桜井(2001)は、これら3つの領域における日本人のポジティブ幻想を検討した。その結果、自己評価については調和性および誠実性においてポジティブ幻想が

(社交性、身体的特徴、経験への開放性については逆の傾向が) また、楽観主義については全般的にポジティブ幻想が、統制知覚については金銭的なギャンブル要素を含む出来事以外でポジティブ幻想が見られた。

同様に、伊藤(1999)は、自分自身をある特性について「平均より上である」ととらえる平均以上効果(above average effect; Dunning, 1993)が、優しさやまじめさといった領域で見られると報告している。外山・桜井(2001)でも調和性および誠実性でポジティブ幻想が見られ、伊藤(1999)と類似した結果となっている。相互協調的自己観が優勢である日本においては、外見や知性など個人を他者から際立たせる能力において自己の有能性を知覚するよりも、調和性や誠実性など、他者との調和を図るのにより能力を持つと知覚する方が、結果的に集団に受け入れられ、適応的ではないかと解釈されている。つまり、ポジティブ幻想は、その社会での規範に合致する特性について行われると考えられる(外山・桜井2001)。

ところで北米においては、ポジティブ幻想と精神的健康には強い関連があるという報告がある(Taylor & Brown, 1998; 1994)。つまり、人が個として独立した存在であるのとらえられ、他者との相違によって自己が明確に定義される社会では、個人は他者に対する自己の有能性を確認し、将来への目標に向かって努力することにより、結果的に適応的に生きることになる。しかし、日本においてはそのような報告は行われていない。遠藤(1997)は、日本人のポジティブ幻想について、親密な他者と自分を比較する際、その他者の方が自分よりもポジティブであるという評価、つまり相

対的な自己卑下を行うが、その親密な他者と自分との関係性は、他の人の親密な関係性よりもポジティブであるとする関係性高揚の存在を指摘した。そのような現状と日本人の精神的健康について検討した遠藤（1999）は、自己概念が明確でなく、人との関係性の中で自己概念がゆれうごく社会である日本においては、北米で見られるようなポジティブ幻想がみられないからと言って、その自分自身への評価の低さと精神的健康の低さを必ずしも結びつけることができないと指摘している。

そこで本研究では、精神的健康などの社会的適応指標について、自己評価や親しさのレベルの異なる他者への評価、およびその他の要素との関連を検討することを目的とし、2つの研究を行った。

研究 1

研究1では、自己のポジティブ幻想および自己・他者評価の比較を行い、それらの評価の特徴と、精神的健康との関係を明らかにすることが目的である。つまり、日本人にとっていずれの側面においてもポジティブ幻想を表出することは、必ずしも北米のように適応的ではないと考えられるが、逆に自己の全ての領域においてネガティブな側面にのみ注目すると不適応に陥ってしまう可能性もある。そこで、本研究ではまず自己・他者評価のパターンを検討する。そして、自己・他者評価のどの側面が精神的健康に及ぼすのかを検討する。その際、人格心理学の議論においてはポジティブ、ネガティブな自他認知は一次元軸上にないことが指摘されている（桑原 1986）ことから、自他評価に用いた特性には、ポジティブ・ネガティブ両方の側面が取り入れられた。他者評価の対象としては、親密性の高低それぞれの対象を選ぶ必要があったが、低すぎると評価の意味をなさなくなることから、他者の中でも最も親密であると考えられる親友と、中程度と考えられる同じクラスのクラスメートの2種類を用いた。

他者との関係性を重視する日本においては、自己についてのポジティブ幻想の高さがそのまま精神的健康の高さにはつながらないと考え、仮説「自己評価におけるポジティブ幻想と精神的健康との間の相関は低い」をたてた。さらに、周囲の人との良好な人間関係を維持することが重要視される日本においては、自分の親友についてポジティブな評価を持つことは適応的であると考え、仮説2「親友に対するポジティブ幻想は、自己の精神的健康と相関関係がある」をたてた。自己および親友への評価に関しては、仮説3「自己評価よりも親友への評価の方がポジティブとなる」をたてた。

方法

予備調査 本研究で用いる性格特性を選定するため、大阪府内の大学で「心理学」を受講する大学生6名（男性47名、女性39名、平均年齢20.86、 $SD=1.23$ ）を対象とした調査で「自分を説明する」のに用いられた性格特性を80個収集した。次に、最終的に選定する性格特性が内容的に偏るのを避けるため、それらの特性それぞれについて、大阪府内の大学生6名（男性11名、女性15名、平均年齢21.96、 $SD=.73$ ）に、(1)人間関係でうまくやっていくにあたって、(2)仕事でうまくやっていくにあたって、重要であると考える度合いをそれぞれ評定させた。その結果、両方において高評定のもの、両方において低評定のもの、人間関係・仕事のどちらか一方のみが高評定のもの種類について、各種類3特性ずつ計12特性を選定した。具体的な特性項目をTable 1に示す。

		人間関係	
		高い	低い
高 い	仕事 関係	我慢強い	細かい
		明るい	気が強い
		温厚な	負けず嫌い
低 い		お人好し	人の言うことを聞かない
		人に尽くす	考えが狭い
		のんびりしている	不安傾向がある

被験者 大阪府内の大学で「心理学測定」を受講する1回生の学生58名のうち、回答に不備のあった者3名を除いた55名（男性19名、女性36名、平均年齢19.6、 $SD=1.68$ ）を分析に用いた。授業時間を利用し、回答に要した時間は約5分間であった。

手続き 予備調査で選定した12個の特性それぞれの、1.重要性、2.自分に当てはまる度合い、3.同性の親友にあてはまる度合い、4.このクラスの一般的なクラスメートに当てはまる度合い、についてそれぞれ「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で評定させた。その後、精神的健康を測定する尺度として、中川・大坊(1996)のGHQ (General Health Questionnaire) -28 に回答させた。最後に自尊心尺度 (Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成1982) について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

結果と考察

各評定対象別パターンの関係をみるため、先行研究に従い、3つの対象人物それぞれに特性評定を合計した

($r = .61-.68$) 合計にあたり、ポジティブ・ネガティブ性があいまいであった項目を除き10項目を選定した。その中で重要度が低かった項目についてはネガティブな意味を持つものであったため、得点を逆転させた。その結果、自己評価得点 ($M=41.69$)、親友評価得点 ($M=45.13$)、クラスメート評価得点 ($M=41.89$) それぞれの間に差があるかどうかを確認するため、3つの得点を従属変数とし、対象人物(自分、親友、一般的なクラスメート)の繰り返しのある1要因分散分析を行ったところ、有意な差が見られた ($F(2, 108) = 6.30, p < .005$)。下位検定の結果、親友への評価と、自己およびクラスメートへの評価との間に有意な差がそれぞれ $t(54) = 3.36, p < .005; t(54) = 2.91, p < .001$ 見られ、親友に対する評価は、自己やクラスメートよりも高いことが明らかになった。これより、仮説3「自己評価よりも親友への評価の方がポジティブとなる」は支持された。

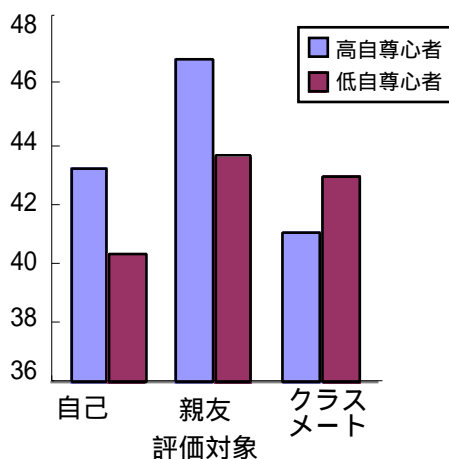


Figure 1 自尊心別、刺激人物への評価

注：得点範囲は7~70。数値が高くなるほど評価がポジティブであることを示す。N = 55。

この対象人物による差が、自尊心の高低によって変化するかを確認するため、対象人物(自分・親友・クラスメート) × 自尊心(高・低)の繰り返しのある2要因分散分析を行った。自尊心は、平均値2.35により高群・低群に2分した。その結果、有意な交互作用効果が見られ ($F(2, 106) = 3.36, p < .05$)、自尊心が高い群は、低い群と比べて、自己および親友を高く評価する傾向にあるが (それぞれ $t(53) = 1.78, p < .10, t(53) = 1.92, p < .10$)、クラスメートに関しては自尊心による差がなかった ($t(53) = 1.44, p > .10$, Figure 1 参照) つまり、高自尊心者は自己や親友という、自分にとって近い対象には低自尊心者よりもポジティブな評価を

行うが、遠い対象に対しては自尊心の差がないと考えることができる。

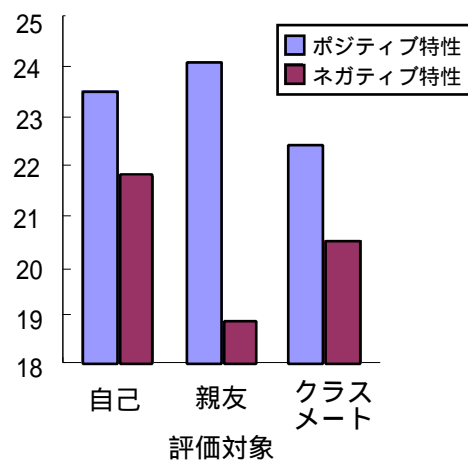


Figure 2 ポジティブ・ネガティブ性の別による刺激人物への評価

注：得点範囲は7~35。数値が高くなるほど評価がポジティブであることを示す。N = 55。

次に、特性のポジティブ・ネガティブ性によって先の対象人物評価に変化が見られるかを確認するため、ポジティブ、ネガティブ、5項目ずつへの評価を合計し(それぞれ $r = .60, .62$) 自己ポジティブ得点、自己ネガティブ得点、親友ポジティブ得点、親友ネガティブ得点、クラスメートポジティブ得点、クラスメートネガティブ得点の6つの得点を作成した。そして対象人物(自己・親友・クラスメート) × 評価性(ポジティブ・ネガティブ性)の繰り返しのある2要因分散分析を行ったところ、有意な対象人物の主効果 ($F(2, 108) = 4.58, p < .05$)、評価性の主効果 ($F(1, 108) = 43.49, p < .001$) および対象人物 × 評価性の交互作用効果が見られた ($F(2, 108) = 6.30, p < .005$)。Figure 2 にその結果を示す。下位検定の結果、いずれの対象人物においても、ポジティブ項目の方がネガティブ項目よりも当てはまると回答されており ($ps < .05$)、ポジティブ項目においては親友がクラスメートよりも高く ($t(54) = 2.47, p < .05$)、ネガティブ項目については親友が、自己やクラスメートよりも低く評価されていた (それぞれ、 $t(54) = 3.95, p < .001, t(54) = 2.33, p < .05$)、つまり、親友はポジティブな項目にはあてはまり、ネガティブな項目には最もあてはまらないと評価され、ポジティブ幻想がより敏感な形で示されていた。全体的に、被験者は親友と比較した相対的な自己卑下を示していることが分かる。その他分析の結果、女性の方が親友やクラスメートをポジティブ視していることが示された。

各特性項目間の相関分析を行ったところ、自己への

ポジティブな評価は、親友へのポジティブな評価と有意な正の相関関係があり ($r = .39, p < .005$)。自己についてポジティブな評価を行う者は、また自分の親友についてもポジティブな評価を行っていることが分かる。この結果および Figure 2 の結果をまとめると、北米における研究で顕著に見られているような、自分自身を親友など自分に近い他者よりも高く評価するという傾向は見られず、自分を高く評価する人は同様に親友も高く評価し、良い親友に恵まれていると感じているようである。また、友人への評価と本人の自尊心との間にも有意な正の相関関係が見られ ($r = .46, p < .001$)、自尊心が高いほど親友への評価も高くなることが示された。自己評価と自尊心の間には有意な相関関係が見られなかったことから、北米での結果とは異なり、自尊心の高さは自己評価ではなく親友など自分の周囲の人への評価と深く関わっている可能性がある。

GHQ-28 の下位尺度との相関分析の結果 (Table 2 参照) 自己のネガティブ項目への得点が高いほど不安や社会的活動障害の度合いが高くなり、また抑鬱症状も高くなることが示された。一方親友の評価はポジティブであるほど自己の抑鬱感が減少することが示された。つまり自己に関しては、ポジティブ幻想の高さではなくネガティブ視の高さが精神的健康と関連することが示されたが、親友に関しては、ポジティブ幻想の高さと自己の精神的健康 (抑鬱感の低さ) が正の方向に関連するという結果となった。つまり、日本人の精神的健康に関わっているのは、自己高揚の大きさ (自己についてポジティブ幻想を持つこと) より、自己卑下の少なさ (自己を大幅に否定視しないこと) である可能性がある。

さらに、自己・親友・クラスメートという対象人物への評価と、自己の精神的健康との関係を見るため、GHQ-28 の素点を基準変数とし、対象人物それぞれに

ついでの評価、性別、自尊心を説明変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行った。その結果、自己評価が有意な影響を及ぼしていた ($r = -.39, t = 3.00, p < .005$)。その他の要因は有意な影響を及ぼしていなかった。つまり、自己評価が高くなるほど GHQ 得点が低い (精神的健康が高い) ことが明らかになった。次に、自己評価の下位尺度、ポジティブな自己評価・ネガティブな自己評価が GHQ 得点に及ぼす影響力が同程度ではない可能性があると考え、それを検証するため、3 対象人物についてのポジティブ・ネガティブ特性得点を説明変数、GHQ 得点を基準変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) を行ったところ、ネガティブ特性の自己評価のみに有意な影響力が見られた ($r = .44, t = 3.43, p < .001$)。つまり、ポジティブな特性についていかに自分が当てはまるかということよりも、ネガティブな特性について自分が当てはまるかどうかという評価の方が、精神的健康には強い影響があるということである。

以上の相関分析および重回帰分析の結果をまとめると、精神的健康と関連があったのは自己ネガティブ視のみであったので、仮説「自己評価におけるポジティブ幻想と精神的健康との間の相関は低い」は支持されたといえる。自己ネガティブ視の強さと精神的健康の低さに正の相関があったことは、日本人の精神的健康には、北米のようなポジティブ幻想よりもネガティブ視が深く関わっている可能性を示唆するものである。これらの結果は、桑原 (1986) が指摘するように、自己へのポジティブ・ネガティブな特性の認知が次元ではなく、独立した次元であることを示唆する。本研究では相関分析の結果、自己へのポジティブ・ネガティブ特性評価間の相関係数は $r = .04$ (n.s.) であり、やはり相関がないことが示されている。その他、親友・

Table 2 自己・他者評価と精神的健康の相関分析

		GHQ下位尺度				GHQ-28	自尊心
		身体的症状	不安・不眠	社会的活動障害	抑鬱		
自己	ポジティブ	-.11	-.02	.12	-.12	-.14	.22
	ネガティブ	.07	.35*	.53**	.36**	.44**	-.13
親友	ポジティブ	-.05	.01	-.15	-.28*	-.17	.50**
	ネガティブ	.13	.03	.08	.20	.17	.22
クラスメート	ポジティブ	-.09	.08	-.01	-.11	-.03	-.17
	ネガティブ	.21	.29*	.07	-.04	.17	.23

注: ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

クラスメートでのポジティブ・ネガティブ評価の相関は $r=.24, .05$ (それぞれ $p<.10, n.s.$) で、親友に対しては、ポジティブな特性があればネガティブな特性が少ない、というような一次元的なポジティブ幻想が保持されていることを示している。

仮説2に関して、自尊心や抑鬱へは、親友のポジティブ幻想の度合いが有意な効果を持っていたことから、仮説2「親友に対するポジティブ幻想は、自己の精神的健康と相関関係がある」は精神的健康指標の中でも自尊心および抑鬱感について支持されたといえる。

研究 2

近年の自己評価研究では、日本人は自分自身に関するポジティブ幻想を持つのではなく、自己と親友など親しい人との対人関係に関するポジティブ幻想を持つ傾向が指摘されている(遠藤 1997; Endo, *et al.*, 2000)。そこで、自己評価および他者評価と関係性評価との関連、またそれらの評価と社会的適応との関連について実証的に検討することが、研究2の目的である。

近年提唱されているソシオメーター理論 (Baumeister & Leary, 1995) では、自尊感情の基盤として社会的関係を重視している。この理論によると、人が個体として存在し続けるには「社会的絆 (social bonds)」が不可欠であり、人には、自分と他者の対人関係の質を常にモニターする「ソシオメーター」という心理的メカニズムが備わっている。そして他者との関係性をモニターした結果、関係パートナーとして十分高く評価されていないと察した時には、ネガティブな情動が生起し、ソシオメーターはそれを防ぐような行動や操作を行うよう動機づけさせ、自己の適応状態をもとの位置に戻すという。この理論は、自尊感情や適応が必ずしも自己完結ではなく、自己と他者とのかわりと深く関係していることを示したという点で評価されている。

その他に、ストレスフルな出来事に対するコーピングの方法には、情動焦点型対処と問題焦点型対処の2種類に大別されることが一般的に知られている (Lazarus & Folkman, 1984) が、近年では、その分類に問題焦点型対処を追加する必要性も指摘されるようになってきている (Coyne & Smith, 1991)。関係焦点型対処とは、対人関係の成立や維持など、対人調節機能にかかわるコーピングであるとされる。加藤(2001)は、ストレスフルな対人関係状況において、良好な関係性を維持する共感的コーピングを使用する頻度が高いほど、心理的ストレス反応が低いことを示した。

このように、人の社会的行動への動機づけには、必

ずしも個人内で完結する利己的なものだけではなく、他者との良好な関係性維持にかかわるものもあることが、近年明らかになってきた。しかし、自己や他者のポジティブ幻想や複数の親密な他者との関係性評価の高さが、GHQ など身体的適応をはじめとする社会的適応に及ぼす影響を実証的に検討した研究は、夫婦関係について検討した遠藤 (1997) を除いてはみられない。よって、この点について検討することが本研究の目的となる。

本研究では、親密な他者に、同性の親友と母親という2種類を選定した。親友や母親を選定したのは、James (1890) の拡張自己の概念でも指摘されている通り、本研究で取り扱う親密な他者という概念によく当てはまると思われたからである。また母親は、社会的絆という意味においても重要な他者であることは明白である。自己・他者評価指標には、あらゆる側面を考慮に入れる必要があると考えBig Five 尺度 (和田、1996) を用いた。また、社会的適応の指標として、精神的健康 GHQ ならびに主観的幸福感を用いたGHQ は過去数週間で適応的でない状態になった頻度を数値にするものである一方、主観的幸福感とは自分の人生への全体的な満足感についてのより幅広い指標であり、複数の指標を用いることは有効であると判断したためである。

先行研究より、周囲の親しい他者と良好な関係性を維持することは、ストレスの低さ、社会的適応の良好性と正の関係があることが予測されるため、仮説1「主観的幸福観は、自己と親友、自己と親との対人関係の良好さと正の関係がある。」をたてた。仮説2は、研究1の結果とも合わせ、「精神的健康は、自己評価との間に有意な正の相関関係を示す。同様に、自己と親友との対人関係、自己と親の対人関係の良好さも同様に精神的健康と関連する。」とした。

方法

被験者 大阪府内の大学生で物理学を受講する1年生の学生52名のうち、回答に不備のあった者名を除いた50名(男性38名、女性12名、平均年齢18.69、 $SD=.64$)を分析に用いた。質問紙は授業時間内に配布し、翌週の授業時間内に回収した。

手続き Big Five 尺度 (和田、1996) より、「外向性」「情緒不安定性」「開放性」「誠実性」「調和性」の各因子に負荷量の高い項目をそれぞれ項目ずつ選び、さらに「開放性」因子のうち「経験への開放性」に関連する項目3つを追加し、合計18項目の性格特性を選定した。それぞれの項目について、自分、自分の親友 (同性で最も親しい友人) についてどの程度あてはまるかについて回答を求めた。また遠藤 (1997;

Endo, et al., 2000) で用いられた親友と自分との関係の良好性を問う項目の中から5項目(例:「親密な」「支え合っている」など) GHQ-28(中川・大坊 1996) 自己の主観的幸福感を測定する3項目(遠藤、1997, Diener, 1994 より関連項目を使用 例「幸福な」「人生に満足した」) について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。最後に自尊心尺度(Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成 1982) に5件法で回答させた。回答に要した時間は約15分であった。

結果と考察

Big Five の各評定値を因子分析(ML法、プロマックス回転)したところ、5因子解が得られた。各因子に負荷する項目は全て和田(1996)と同様であった。「経験への開放性」として付加した項目は全て「開放性」因子に付加したため、因子負荷量の低い項目を除外し、再度因子分析を行い13項目ずつ5因子の同様の結果を得た(因子負荷量は7-.99)

評価対象(自己評価・親友評価・親評価)5×因子(外向性、情緒不安定性、開放性、誠実性、調和性)を独立変数とした繰り返しのある2要因分散分析を行ったところ、評価対象の主効果($F(2, 94) = 3.62, p < .05$)、5因子の主効果($F(4, 188) = 12.62, p < .001$)と交互作用効果($F(8, 376) = 8.10, p < .001$)が得られた(Figure 3 参照)。下位検定の結果、自己評価は親友・親よりも外向性、誠実性因子において低く、情緒不安定性因子において高いことが示された。さらに調和性因子においては、自己は友人よりも低く親よりも高いこと、開放性因子については、親友が親よりも高いことが示された。

5因子中3因子においては、親・友人評価の間に有意差はみられず、一般的に自己よりも高い評価を得ていることが分かる。開放性・調和性においてのみ、友人の方が親よりも高い評価を得ているのはなぜだろうか。一般的に親子関係には友人関係と異なり地位格差が存在するといわれており、またその年齢差から親は保守的となりやすいことが知られている。この役割性の違いを考えると、調和性(温和な、短気な(逆転項目)など)や開放性(多才な、進歩的など)について、親が親友よりも低い評価を受けることは妥当であると考えられる。それらを除くと、全体的にポジティブな側面に関しては、親や親友よりも自分は相対的に当てはまらず、ネガティブな側面に関しては自分は当てはまると認識する傾向にある。この結果は、相対的自己

卑下(遠藤 1997)を示すものであり、先行研究の結果を追従するもので、日本人は自分に近い他者を自己と比較すると相対的にポジティブに評価することが再確認された。

主観的幸福感と各評価との相関分析を行ったところ(Table 3 参照) 自己の外向性の高さ、親の開放性の高さ主観的幸福感の高さとの間に有意な相関関係が見られた。しかし、親友への評価は有意な結果をもたらさなかった。一方、自己と親友の関係性、また自己と親との関係性が、主観的幸福感との間に有意な相関関係を示していた。主観的幸福感には、自己や親への評価と同時に、対人関係の良好性が関連しているといえる。これは、仮説1「主観的幸福感には、自己と親友、自己と親との対人関係の高さがかかわる。」を支持するものである。

Table 3 自己・他者評価と精神的健康・主観的幸福感の相関分析

		GHQ-28	自尊心	主観的幸福感
自己	外向性	-.13	.36**	.46**
	情緒不安定性	.38**	-.40**	-.18
	誠実性	-.06	.08	-.27+
	調和性	-.03	-.07	.08
	開放性	-.09	.39**	.13
親友	外向性	-.22	.25+	.08
	情緒不安定性	.04	.13	-.02
	誠実性	.06	-.13	-.17
	調和性	.06	.16	-.01
	開放性	.17	-.28+	.07
親	外向性	-.09	-.17	.11
	情緒不安定性	.27+	-.40**	.01
	誠実性	-.09	.18	.11
	調和性	-.14	.11	.14
	開放性	.15	.04	.37**
親友との関係性		-.19	.06	.30*
親との関係性		-.12	.06	.43**

注: ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

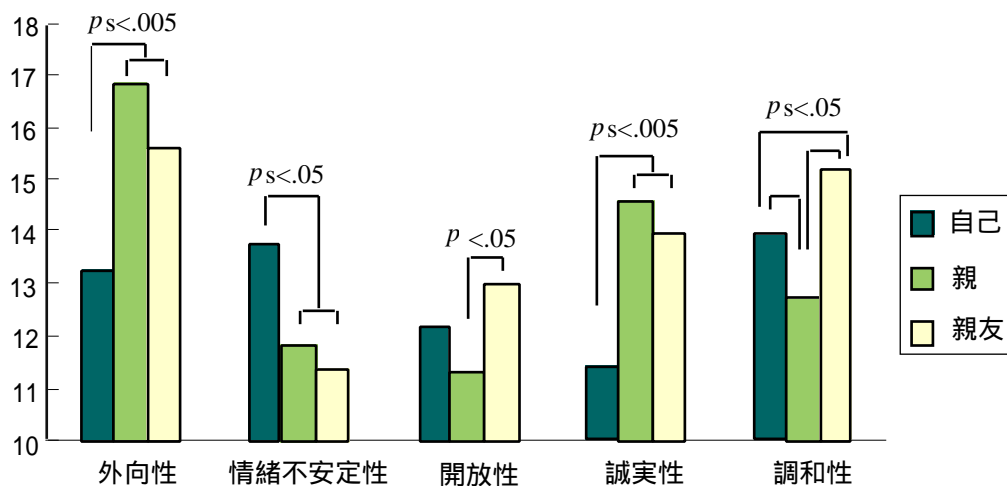


Figure 3 性格の5大特性それぞれに対する、自己・親・親友評価

次に、精神的健康度 (GHQ 得点) と各評価の相関分析を行った結果、GHQ 得点の高さ (精神的健康の低さ) には、自己の情緒不安低性が正の相関を、親の情緒不安定性が弱い正の相関を示したのみにとどまった。このことから、精神的健康には長期間一緒に生活することによる影響が大きいことを示唆する。一方、親友への評価および親友や親との関係性とは相関関係がないことが示された。よって仮説2「精神的健康は、自己評価との間に有意な正の相関関係を示す。同様に、自己と親友との対人関係、自己と親の対人関係の良好さも同様に精神的健康と関連する。」は支持されず、情緒不安定性についてのみ部分的に支持された。

また自尊心と各評価の相関分析の結果、自己の外向性の高さ、情緒不安定性の低さ、開放性の高さに関連があることが示された。親友評価については、外向性と開放性の高さが、自己の自尊心の高さと弱い関連を持つことが示された。親への評価に関しては、情緒不安定性の低さと中程度の相関関係があることが示された。そして、親友や親との対人関係性は関連を持たないことが示された。自尊心や精神的健康についての評価は、自己や身体・精神的現状をどのようにとらえるか、また今までとらえてきたかがかかわっているものであり、親友や親などの現在の人間関係の良好性は影響力を持たないのであろうか。

まとめると、社会的適応のうち主観的幸福感については、自己評価、親の評価、そして親友と自己、親と自己という関係性が有意な相関を持っていた。一方、精神的健康度や自尊心には、親友と自己、親と自己という関係性が有意な相関を持たず、自己や親の情緒不

安定性の低さ、親友の外向性の高さが正の関係を示した。

総合考察

本研究では、親密性の高い親友や親が自己よりもポジティブに評価されており、親密な他者と比較すると相対的自己卑下が確認された。しかし、本研究の結果を鑑みると、親友や親という親密性の高い他者への評価が自己よりもポジティブであることは、日本においては必ずしも不適応を意味しないように思われる。研究1では、自己のポジティブ視ではなくネガティブ視の大きさが精神的健康を低め、また親友へのポジティブ視の大きさが自己の精神的健康と正の相関関係にあることを示した。また、研究2では、主観的幸福感には親友や親との関係性のポジティブさと正の相関関係にあることが示された。

このように本研究は、日本においてはポジティブな自己認知ではなくポジティブな対人関係性の認知が、主観的幸福感のような一般的な社会的適応の程度を高める重要な要因であることを示唆する現象をとらえたが、今後はその原因究明をも視野に入れる必要があるだろう。そのためには、文脈により変化しうる自己概念のあいまい性の高さの度合い、その自己認知と自己呈示の関係を実証的に検討する必要がある。他方、本研究はポジティブな関係性認知が身体的・精神的な健康への予測子とはならない可能性を示した。親友との関係性の中にも様々な要因がかかわっている可能性もあり、今後は、その友人とどの程度頻繁に会うのか、知り合ってどのくらいか、等の変数も含めた分析が必

要となろう。また、最も親しい友人とは別に、日常的に最も頻繁に相互作用をする友人（集団）との関係など、対人関係のある程度広範囲に検討する必要もあると思われる。

日本における関係性の重要性に関してはMarkus & Kitayama (1991) の指摘が有用である。彼女らの指摘によれば、相互依存的自己観が優勢である日本人にとっては、他者との関係の中で自分の有能性を主張するのではなく、他者と良好な関係を築き、維持することが重要となる。よって、そこでのポジティブな自己像とは、他者、とりわけ親密な他者との関係性を良好に保つ能力があることであると考えられる。そしてさらに、その能力が社会的適応につながっていく。

この結果は、ソシオメーター理論(Baumeister & Leary, 1995) の主張とも軌を一にするものである。人が適応的に生きていくためには社会的絆が不可欠であり、何らかの理由でその絆がなくなった時には、不適応に陥る可能性が高くなる(Baumeister & Leary, 1995)。他者との関係性から排除されないためには、社会、特に親密な他者から受容されていることが必要である。よって、人は、自分が所属する社会的文脈の中でより受け入れられると考える自己像を獲得し、主張していくと考えられる。今後は、さらに多種類の社会的適応指標を用いて知見を重ねていくことが重要となろう。

本研究は、従来欧米における自己研究で行われてきたような、自己を独立した存在ととらえた場合の評価（ポジティブ幻想）と精神的健康の関連性、また、自己を社会的関係や文脈としてとらえた場合の評価と精神的健康の関連性について検討し、その関係性の重要性を実証的に示したという意味で、意義があると考えられる。しかし他方で限界もある。まず親密な関係を親友関係と親子関係に絞ったことにより、結果が限定的にならざるを得なかったことがあげられる。また、本研究は、自己評価や関係性評価と精神的健康の相関関係を確認するにとどまったため、因果関係については明確な議論ができない。今後は、時系列的研究を行うことにより、因果関係の解明をも視野に入れ、対人関係の認知や他者への評価がどのように主観的幸福感や精神的健康、ストレス反応などの社会的適応に関わるのかを検討していくことは意義深いと思われる。また対象とする親密な関係性の範囲や対象とする年齢層を広げて研究を行うことも有意義であろう。

引用文献

Baumeister, R. F. 1998 The self. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social*

- psychology: Vol. 1* (4th ed., pp. 680-740). New York: McGraw-Hill.
- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Coyne, J. C. & Smith, D. A. 1991 Couples coping with a myocardial infarction: A contextual perspective on wives' distress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 404-412.
- Dunning, D. 1993 Words to live by: The definitions of social concepts and categories. In J. M. Suls (Ed.), *Psychological perspectives on the self: Vol.4* (pp.99-126). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 遠藤由美1997 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 *心理学研究*68, 387-395.
- 遠藤由美1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す実験社会心理学研究39, 150-167.
- Endo, Y., Heine, S., & Lehman, D. 2000 Culture and positive illusions in close relationships: How my relationships are better than yours. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 1571-1586.
- Heine, S. J., Lehman, D. R. Markus, H. R., & Kitayama, S. 1999 Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, 106, 766-794.
- 伊藤忠弘1999 社会的比較における自己高揚傾向 平均以上効果の検討 *心理学研究* 70, 367-374.
- James, W. 1890 *The principles of psychology: Vol. 1*. New York: Holt. (今田恵訳 1939 心理学 岩波書店)
- 加藤 司2002 共感的コーピング尺度の作成と精神的健康との関連性について *社会心理学研究* 7, 73-82.
- 桑原知子1986 人格の二面性測定の試み *教育心理学研究* 34, 31-38.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company.
- Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 中川泰彬・大坊郁夫1996 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Taylor, S. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 211-222.
- Taylor, S. & Brown, J. D. 1994 Positive illusion and well-being revisited: Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, 116, 21-27.
- 外山美樹・桜井茂男 2001 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 *心理学研究*2, 329-335.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子1982 認知された自己の諸側面の構造 *教育心理学研究*0, 64-68.
- 和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five 尺度の作成 *心理学研究*7, 61-67.

註

- 1) 本論文を作成するにあたりご指導いただいた、大阪大学大学院人間科学研究科教授大坊郁夫先生に心より感謝申し上げます。また、本研究の実施に際してご協力頂きました、神戸大学大学教育センター助教授米谷淳先生、大阪大学大学院理学研究科教授大山忠司先生、そして調査に回答してくだ

さった学生の皆さんに、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

- 2) 中央の2つの特性は、その重要度評定の得点差が近かったため、「ポジティブ特性」「ネガティブ特性」と2分してそれぞれ合成変数に含めることを避けた。

Relationships among self- and other- positive illusions and social adaptation

Chihiro Kobayashi (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

2 studies were conducted for the purpose of examining relationships among self- and other- positive illusions and psychological well-being. In the questionnaire, Ss evaluated how various traits applied to themselves, their best friend (close other), and their fellow classmates (distant other). They also rated how positive their best-friendships were, their degree of psychological well-being (measured by the General Health Questionnaire), and their subjective well-being. Study 1 revealed that best friend and self were evaluated more positive than their classmates, regardless of their self-esteem level. Also, the degree of negative self-view was negatively correlated with their psychological well-beings. Study 2 revealed that Ss' perceived best friendships and parent-child relationships were positively correlated with their subjective well-beings, while the level of self-esteem was positively related to Ss' psychological health. The importance of conducting empirical studies on people's social adaptation was discussed, with the self concept considered in several interpersonal relationships.

Keywords: self-evaluation, other-evaluation, positive illusion, psychological health, subjective well-being